

厚生労働科学研究費補助金 (がん対策推進総合研究事業)

(分担研究報告書)

先進的な医療の用語や補完代替療法として用いられている療法に対する認識

～一般市民を対象としたアンケート調査～

研究協力者 西迫 宗大 国立がん研究センターがん対策研究所がん情報提供部 (特任研究員)

研究協力者 齋藤 弓子 国立がん研究センターがん対策研究所がん情報提供部 (特任研究員)

研究分担者 高山 智子 国立がん研究センターがん対策研究所がん情報提供部 (部長)

研究要旨

本研究では、一般市民を対象としたWeb調査により、先進的な医療に関する用語（標準治療、治験、先進医療、自由診療）に対する認識、がん治療の補完代替療法のうち日常生活でも広く用いられている内容について現在までの利用状況とがん治療が必要になった場合を想定した利用意向と利用したい理由などを明らかにし、これらの情報を提供する際の課題を検討した。

その結果、一般市民における先進的な医療に関する用語に対するイメージは、実際の内容とは異なって捉えられていると考えられた。がんと診断され治療が必要となった場合を想定した利用意向は、一般的に広く認知・利用されていると思われる項目（サプリメントや健康食品など）が上位であったが、あまりよく知られていないと思われる項目（セラピューティック・タッチ、レイキなど）の利用意向もあることが示された。また、これらのがん治療の補完代替療法として利用したい理由として「がんを完治することができるかもしれない」との回答が全体の4割を上回っており、補完代替療法に対し過度な期待を持つ者がいることが伺えた。

先進的な医療に関する用語や補完代替療法に関する情報を提供するには、それらの内容や効果、安全性について正しい知識が持てるよう、目的や利用時の注意点等をわかりやすく提示する必要がある。

A. 研究目的

先進的な医療用語や補完代替療法に関する情報は、理解が難しく、間違った解釈に基づき用いられることで健康被害を引き起こすことが懸念される。そのため、がんと診断される前の一般市民を対象に、先進的な医療用語や補完代替療法に対する認識を把握し、情報提供することが求められる。

本研究では、一般市民を対象としたWeb調査により、先進的な医療に関する用語の認識やがん治療の補完代替療法のうち日常生活でも広く用いられている内容の現在までの利用状況とがんの治療が必要になった場合を想定した利用意向およびそれらを利用したいと思う理由を明らかにし、これらの情報を提供する上での課題を検討することを、本研究の目的とした。

B. 研究方法

本調査はWebアンケートフォームを用いた無記名自記式での調査である。調査期間は2023年3月20日

～4月3日であった。Web調査会社にパネル登録している一般市民2,000人を対象とし、調査協力を依頼した。

調査項目は以下である。

- 1 個人属性 (性別、年代、最終学歴、医療職としての就業経験)
- 2-1) 先進的な医療の用語の認知度
標準治療、治験、先進医療、自由診療について「よく知っている」「言葉だけは知っている」「聞いたことがない」「わからない」の回答肢を設け、認知度を把握した。
- 2-2) 先進的な医療の用語のイメージ
標準治療、治験、先進医療、自由診療について[治療効果が高い][安全である][現時点で一番よい治療である][予測できない副作用がある][がんと言われたら利用したい]の項目のあてはまる程度を「とてもそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」「分から

ない」の回答肢を設け、それぞれの用語に対するイメージを把握した。

3-1) 補完代替療法のうち日常生活でも用いられている内容（以下の20項目）の現在までの利用経験

①ホメオパシー、②伝統的中国医学（例：鍼灸、中国漢方、薬膳 など）、③アーユルヴェーダ、④認知・心理療法、⑤瞑想、⑥音楽療法、⑦ダンス療法、⑧アロマセラピー、⑨ハーブ、⑩健康食品、⑪サプリメント、⑫カイロプラクティック、⑬整体、⑭マッサージ、⑮リフレクソロジー、⑯レイキ、⑰セラピューティック、⑱セラピューティック・タッチ、⑲気功、⑳電磁療法

3-2) がんと診断された場合を想定した利用意向と利用したいと思う理由

分析は、それぞれの調査項目について、全体に占める割合を算出し、グラフ化して視覚的に確認した。

（倫理面への配慮）

本研究は、個人情報収集しないため研究倫理審査には申請しないが、国立がん研究センター研究倫理審査委員会より「審査不要」の判断を得て実施した(6000-073)。また、対象者へは、本研究の目的・方法・倫理的配慮を記した文書をよく読み、回答するよう依頼した。また、Web回答フォームは「協力に同意する」にチェックした者のみ回答できるように設定した。

C. 研究結果

1 回答者の属性（図1.1～1.5）

調査協力に同意が得られた2000名を分析対象とした。回答者の性別は、男性が61.7%、女性が38.3%であり、年代は、30～50歳代が7割であった。最終学歴は「大学・大学院」との回答が5割を占めていた。医療職としての就業経験がある者は約1割であった。

2-1) 先進的な医療に関する用語の認知度（図2-1）

先進的な医療に関する用語の認知度は、先進医療（92.3%）、治験（90.2%）、自由診療（69.2%）、標準治療（29.8%）の順に（よく知っている・言葉だけは知っている）と回答した者をあわせた）回答割合が高かった。

2)-2. 先進的な医療に関する用語に対するイメージ

「標準治療」のイメージは、安全である（46.5%）、がんと言われたら利用したい（28.2%）、現時点で一番良い治療法である（20.8%）、治療効果が高い（16.5%）、予想できない副作用がある（14.8%）の順に

（とてもそう思う・そう思うと回答した者をあわせた）回答割合が高かった（図2-2）。

「治験」のイメージは、予想できない副作用がある（67.9%）、がんと言われたら利用したい（23.5%）、治療効果が高い（16.6%）、安全である（9.6%）、現時点で一番良い治療法である（9.2%）の順に（とてもそう思う・そう思うと回答した者をあわせた）回答割合が高かった（図2-3）。

「先進医療」のイメージは、治療効果が高い（70.8%）、がんと言われたら利用したい（54.5%）、現時点で一番良い治療法である（53.0%）、予想できない副作用がある（47.2%）、安全である（27.6%）の順に（とてもそう思う・そう思うと回答した者をあわせた）回答割合が高かった（図2-4）。

「自由診療」のイメージは、予想できない副作用がある（27.4%）、治療効果が高い（17.4%）、がんと言われたら利用したい（12.3%）、安全である（11.0%）、現時点で一番良い治療法である（10.1%）の順に（とてもそう思う・そう思うと回答した者をあわせた）回答割合が高かった（図2-5）。

3)-1,2 補完代替療法として用いられる内容（20項目）のこれまでの利用状況と、がんの治療が必要になった場合を想定した利用意向（図3-1～3-3）

補完代替療法として用いられる内容（20項目）のうち、現在までに利用したことがある療法はサプリメント（69.2%）が最も多く、次いでマッサージ（55.8%）、健康食品（53.8%）、整体（43.3%）、伝統的中国医学（27.5%）の順であった。一方、利用したことがあるとの回答割合が低かった項目は、セラピューティック（0.8%）、セラピューティック・タッチ（0.8%）、ダンス療法（1.0%）、ホメオパシー（1.8%）、レイキ（1.8%）であった。

がんと診断された場合を想定したとき利用したいと思うと回答した者の割合は、マッサージ（40.5%）が最も多く、次いでサプリメント（38.5%）、健康食品（35.4%）、整体（30.3%）、アロマセラピー（29.2%）の順であった。一方、利用したいと回答した割合が低かった項目は、レイキ（3.4%）、セラピューティック（3.6%）、セラピューティック・タッチ（3.7%）、ホメオパシー（4.9%）であった。それらの療法を利用したいと思う理由（とてもそう思う・そう思うと回答した者をあわせた割合）は「ストレスを軽減しリラックスできるから（73.9%）」が最も多く、「体調を整え普段通り生活を送ることができると思うから（73.0%）」、「がんに対抗する力を高めることが

できると思うから (69.3%)」、「痛みや苦しみに対処し、精神的な支えとなると思うから (69.2%)」、「手術や薬物療法 (抗がん剤治療)・放射線療法といった治療の副作用を抑えることができると思うから (55.5)」の順であった。また、「がんを完治することができるかもしれない (42.5%)」と回答した者もいた。

D. 考察

本研究により、一般市民における先進的な医療に関する用語に対する認識と、がんの治療の補完代替療法として用いられる内容について、現在の利用状況とがんの治療が必要になった場合を想定した利用意向を把握することができた。

がん治療において推奨されるのは標準治療であるにも関わらず、「標準治療」という言葉を聞いたがであると回答した者は全体の3割弱であった。一方、「先進医療」および「治験」という言葉は全体の9割以上が知っていると回答しており、一般市民に広く認知されていることが伺えた。これらの用語に対するイメージとして、がんになったら利用したいとの回答割合は、「先進医療」が「標準治療」を上回っていた。

「先進医療」という言葉は、保険会社等の宣伝や広告などで目にするため、一般市民にとっては治療効果が高く、良い治療方法として捉えられている可能性が考えられる。先進的な医療に関する情報を提供する際には、既に一般市民が有しているイメージを想定して、内容や表現を吟味する必要がある。

補完代替療法として用いられている内容の現在までの利用経験は、サプリメントや健康食品、マッサージや整体の順であり、セラピューティック、セラピューティック・タッチ、レイキ、ダンス療法などは利用経験が少なかった。がんと診断され治療が必要となった場合を想定したとき利用したい内容は、一般的に広く認知・利用されていると思われる項目 (サプリメントや健康食品など) が上位であったが、あまりよく知られていないと思われる項目 (セラピューティック・タッチ、レイキなど) についても利用したいと回答されていた。がん治療の補完代替療法として、これまで利用されていない項目も選択肢に含まれる可能性があるため、多種多様な療法に関する情報を正しく伝えられるよう努める必要がある。

また、これらのがん治療の補完代替療法として利用したい理由として「ストレスを軽減し、リラックスできる」、「体調を整え、普段通りの生活を送ることができる」などが上位である一方で、「がんを完治することができるかもしれない」との回答が全体の4割

を上回っていた。これらの結果からは、補完代替療法に対し過度な期待を持つ者がいることが伺え、実際のがん治療や補完代替療法を行う際の妨げとなる可能性がある。

以上より、先進的な医療に関する用語や補完代替療法に関する情報を提供する際には、それらの内容や効果、安全性について正しい知識が持てるよう、目的や利用時の注意点等をわかりやすく提示する必要があると考えられた。

E. 結論

一般市民は、先進的な医療に関する用語に対して、実際の内容とは異なるイメージを有していることが示された。またがん治療の補完代替療法に対し、がんの完治といった過度な期待を持つ者がいることが伺えた。先進的な医療に関する用語や補完代替療法に関する情報を提供する際には、それらの内容や効果、安全性について正しい知識が持てるよう、目的や利用時の注意点等をわかりやすく提示する必要がある。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 書籍発表
 2. 学会発表
- なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得
 2. 実用新案登録
 3. その他
- なし

資料

1) 回答者の属性

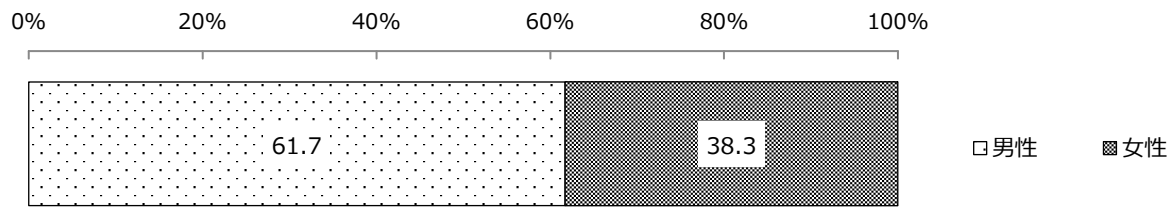


図 1.1 性別 (% , N = 2000)

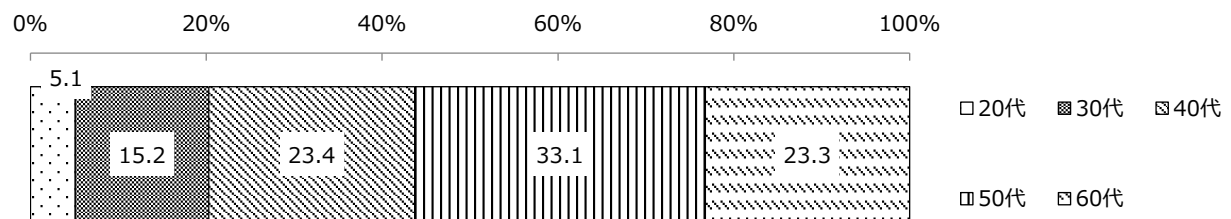


図1.2 年代 (% , N = 2000)

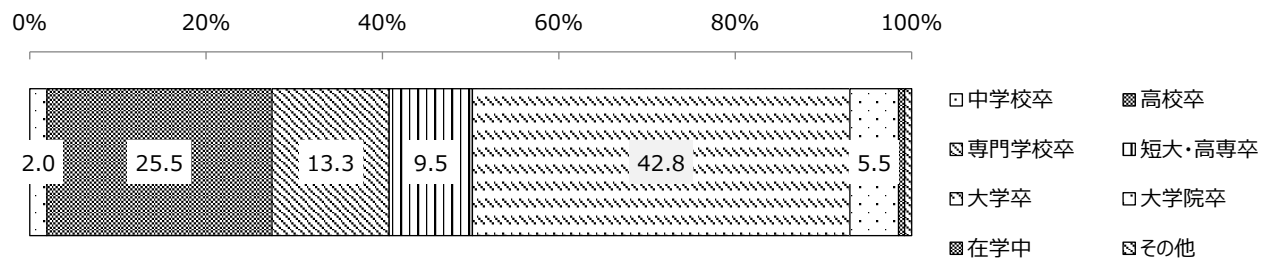


図1.3 最終学歴 (% , N = 2000)

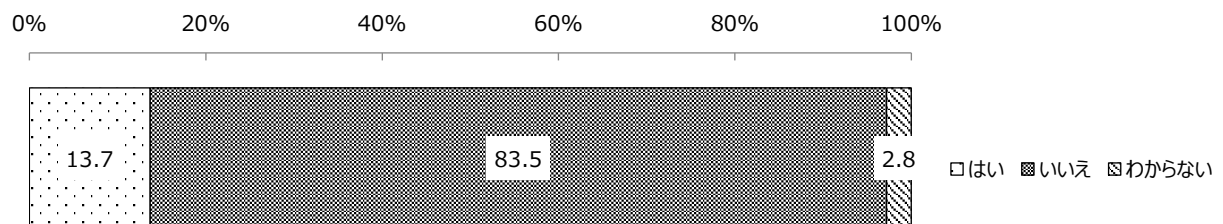


図 1.4 医療職としての就業経験 (% , N = 2000)

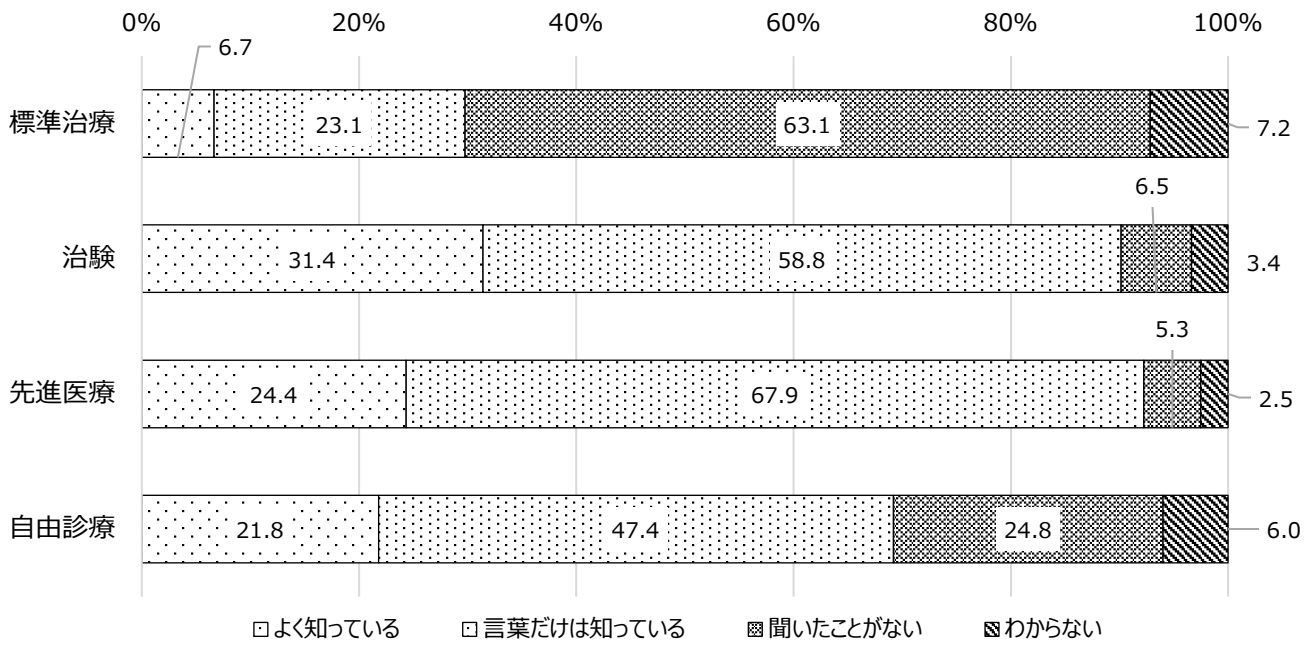


図2 先進医療に関する用語の認知度 (% , N = 2000)

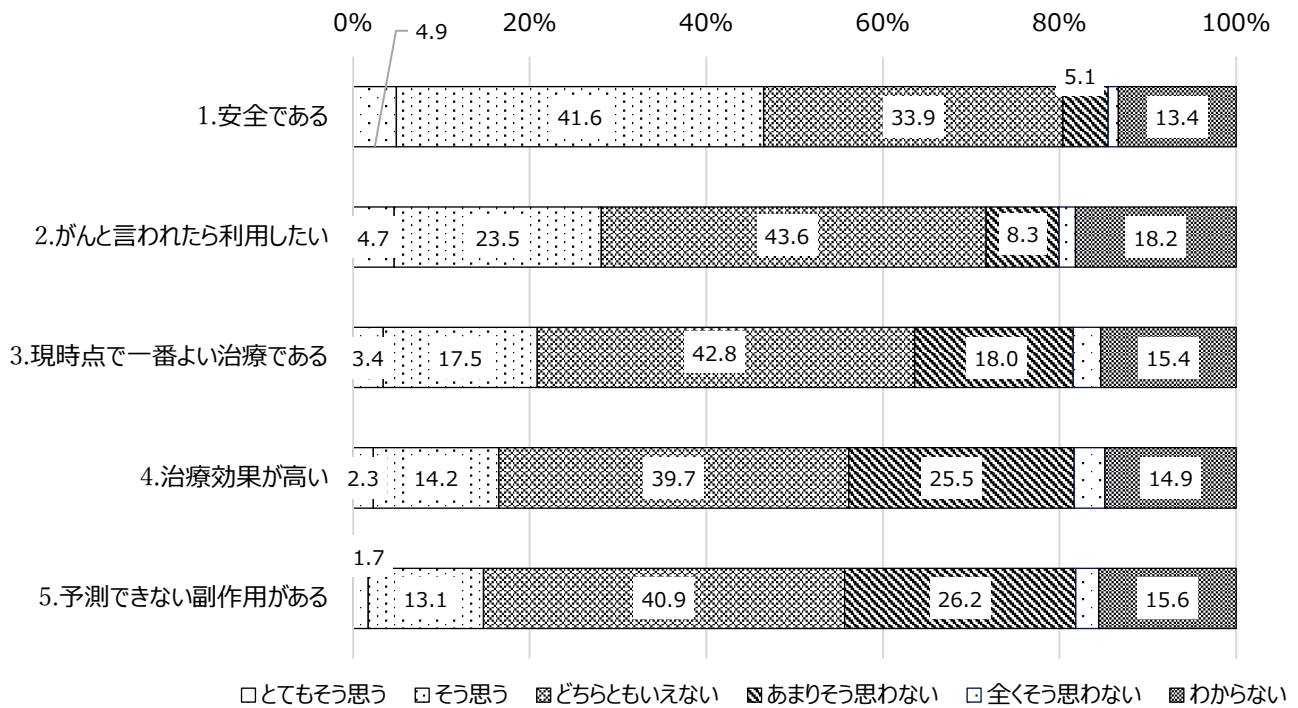


図2-2 「標準治療」という言葉のイメージ (% , N = 2000)

※縦軸 1～5 は、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者をあわせた回答割合が高かった順

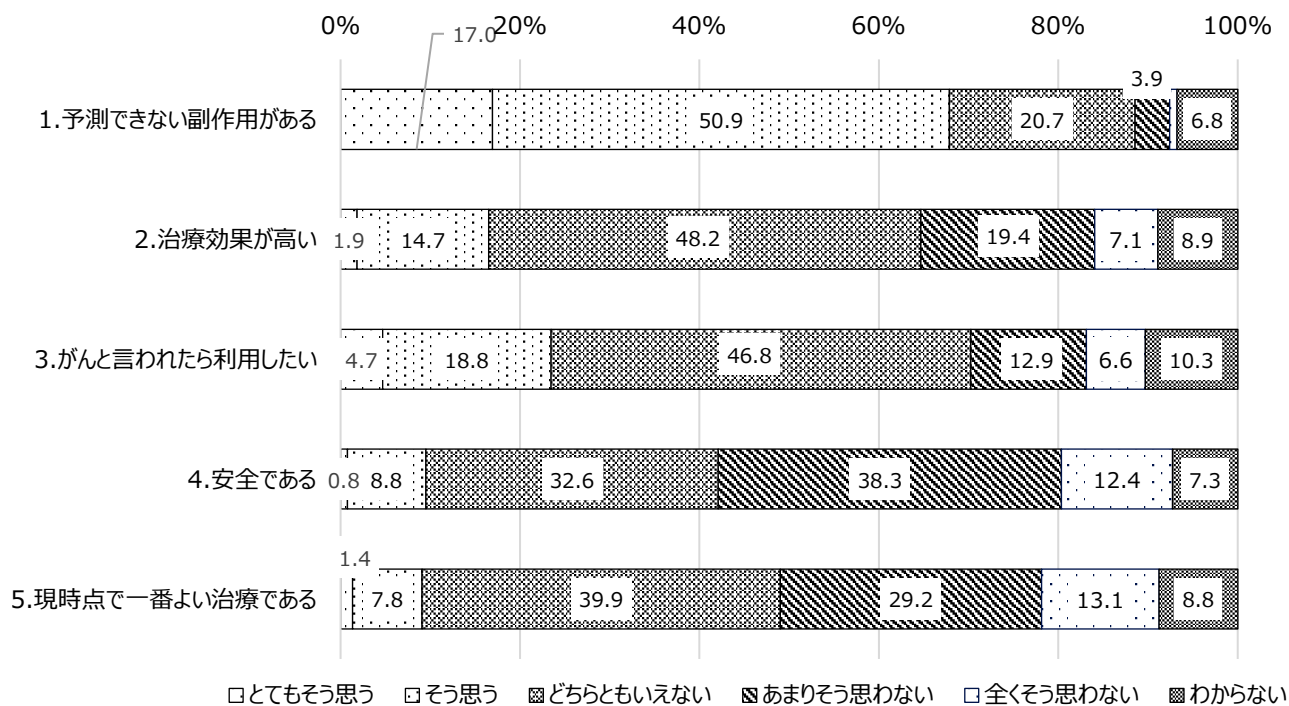


図2-3 「治験」という言葉のイメージ (% , N = 2000)

※縦軸 1~5 は、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者をあわせた回答割合が高かった順

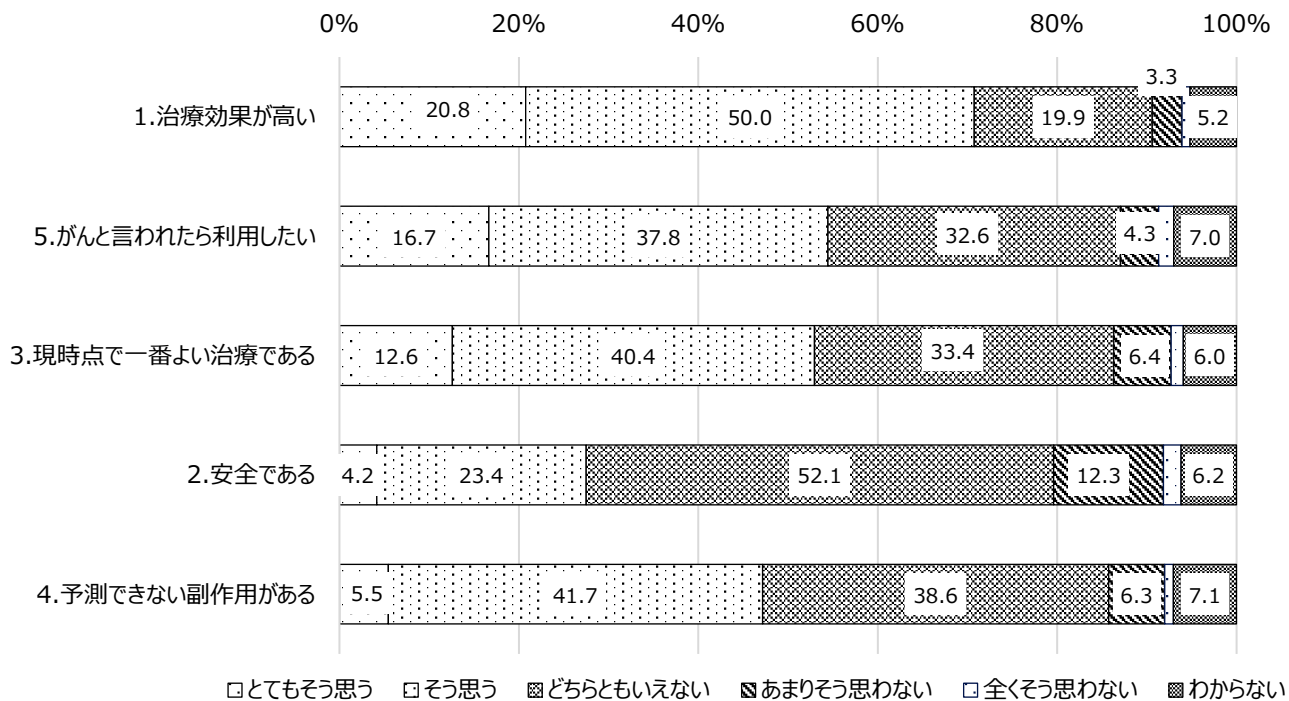


図2-4 「先進医療」という言葉のイメージ (% , N = 2000)

※縦軸 1~5 は、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者をあわせた回答割合が高かった順

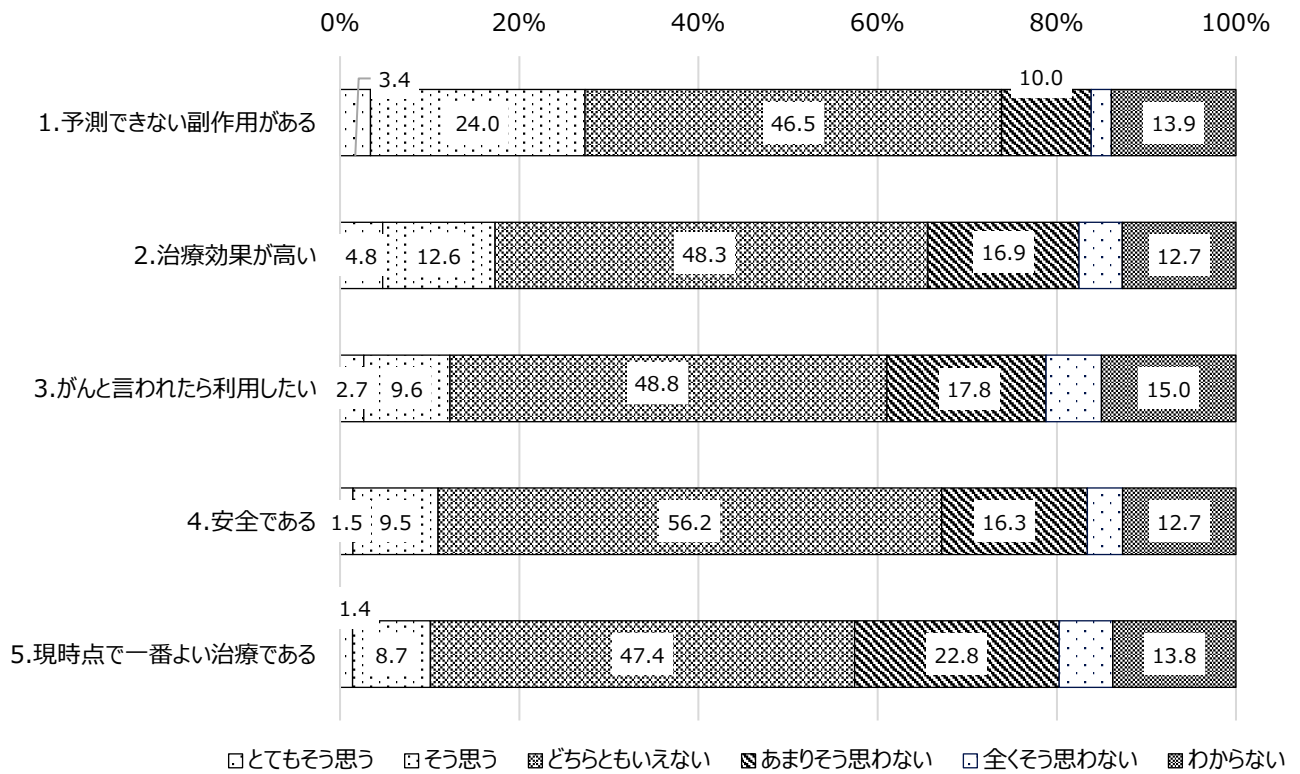


図2-5 「自由診療」という言葉のイメージ (%，N = 2000)

※縦軸 1～5 は、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者をあわせた回答割合が高かった順

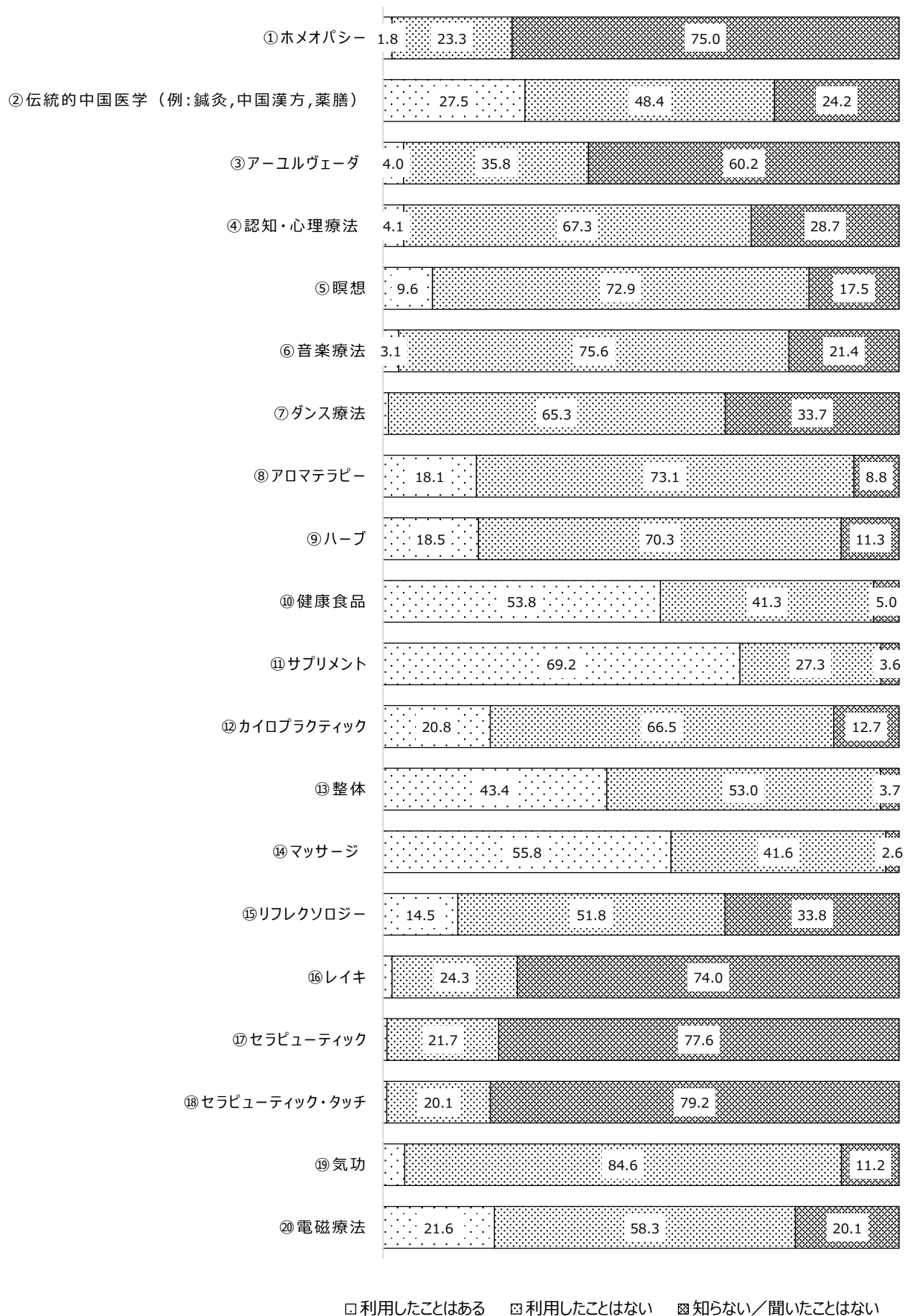


図3-1 補完代替療法として用いられる療法のこれまでの利用経験
(%, N = 2000)

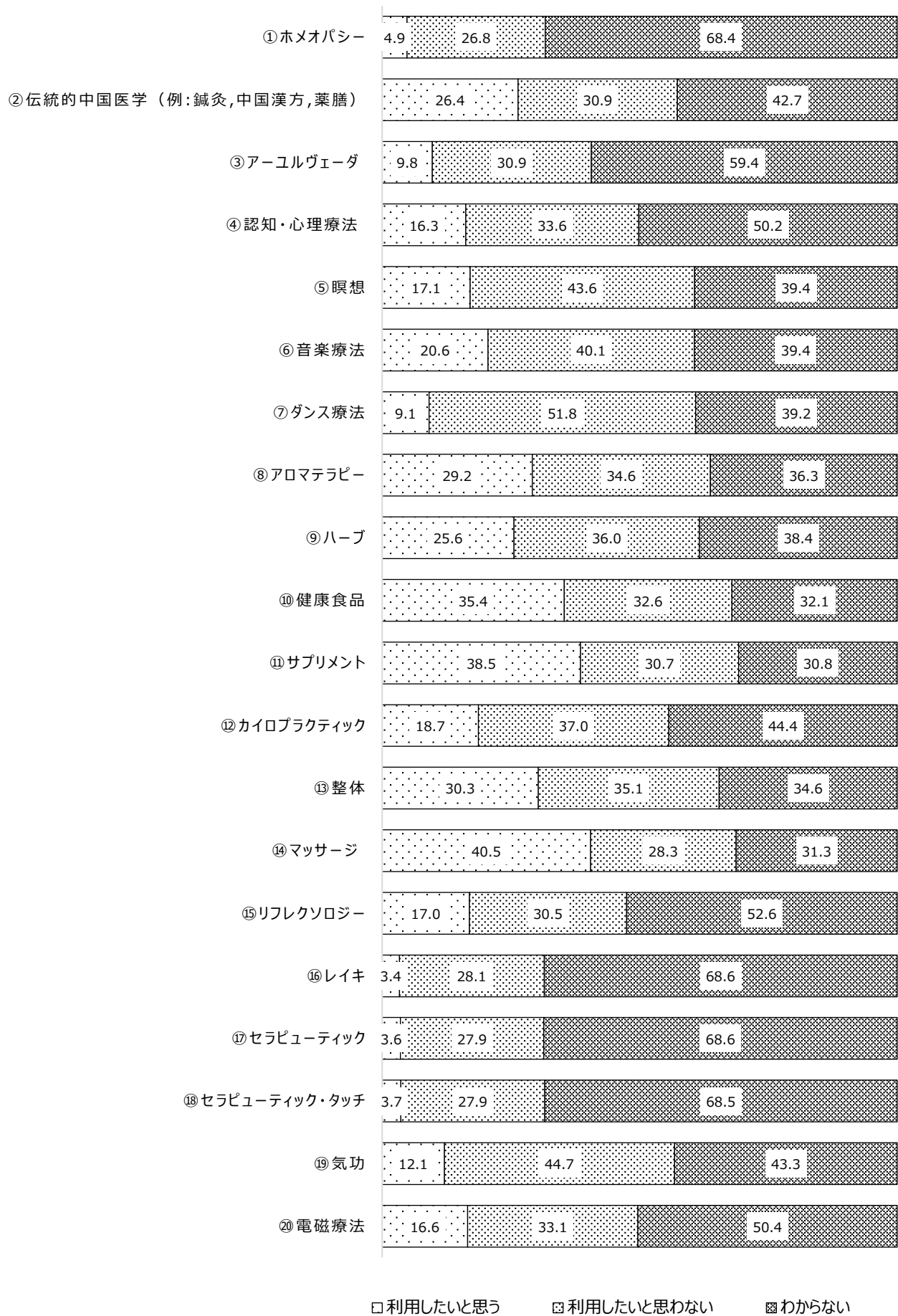


図3-2 がんと診断され治療が必要となった場合を想定した利用意向
(%, N=2000)

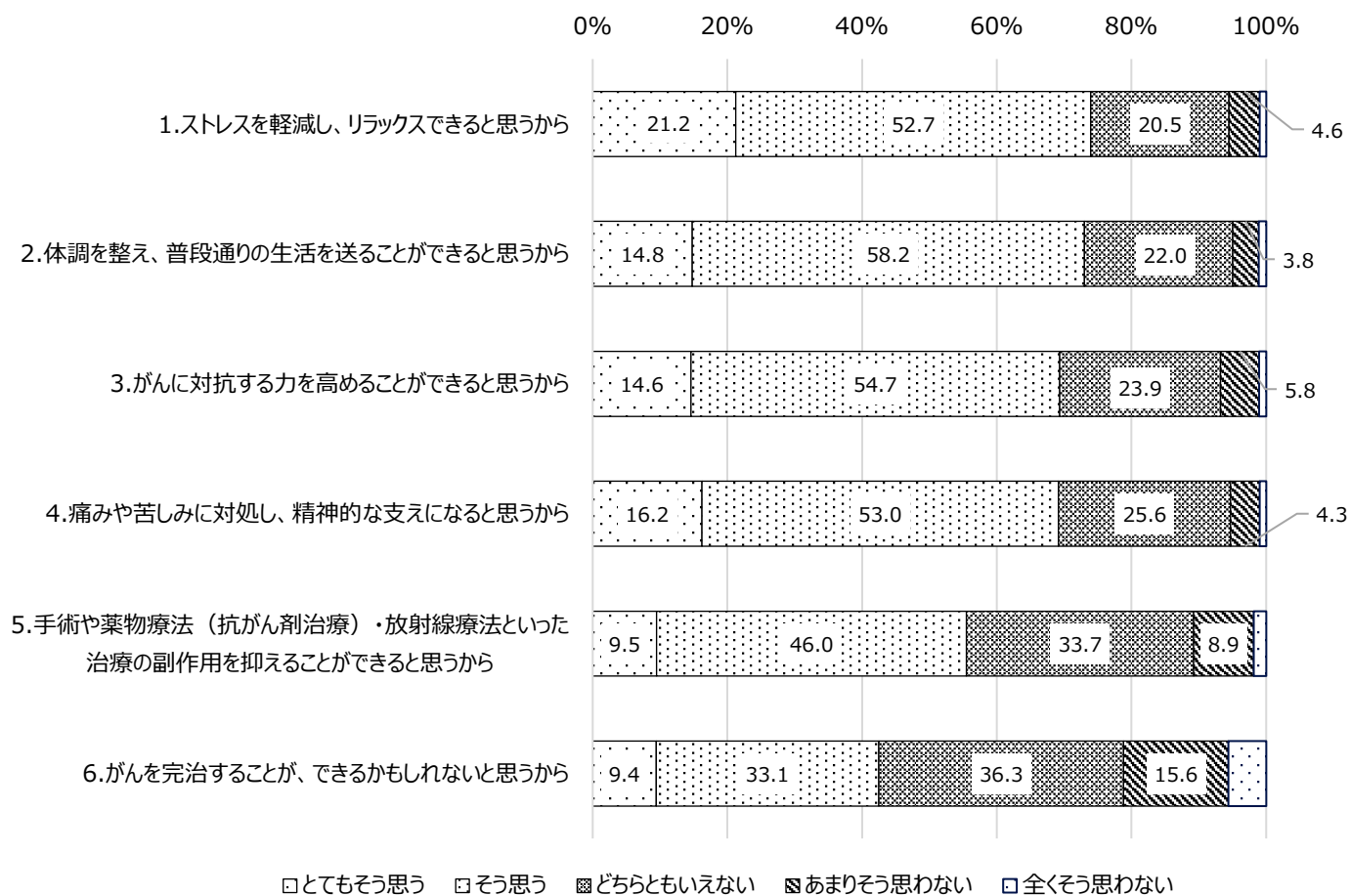


図3-3 がんと診断された場合を想定したとき利用したと思う理由
(%, N = 1252)

※縦軸 1～6 は、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した者をあわせた回答割合が高かった順